

おもろさうしの音読表記について

照屋 理

About *Omoro-Saushi's* reading aloud notation

Makoto TERUYA

名桜大学

環太平洋地域文化研究 No. 2 抜刷

2021年 3 月

## おもろさうしの音読表記について

照屋 理\*

### About *Omoro-Saushi's* reading aloud notation

Makoto TERUYA\*

#### 要 旨

本稿は、宮良当壮（1893 [明治26] ~1964 [昭和39] 年）による『おもろさうし』の「音記」記事と、日本統治期台湾で開催されていた台北おもろ研究会のテキストに収載されたオモロ音声表記の記録とを比較し、かつてのオモロ音読の有り様や方法等について検証するためのものである。

言語学者・宮良は「国語音声の研究の立場から首里びとの正しい発音を記して研究に資したい」（宮良 1980: p473）としてオモロの音読について国際音声字母で表記した。また台北おもろ研究会は、首里金城町出身で、宮良より8歳年上の比嘉盛章（1885 [明治18] ~1946 [昭和21] 年）がおり、同じく首里方言を参考にしたオモロ研究が行われ、基本的にローマ字で音声が表示された。

本稿での比較検討により、オモロ音読の表記を試みた宮良の論考と台北テキストに、首里語で読むという、近似の研究姿勢を持ちながら相違点があるということが分かった。またそれは、音読の考え方の違いに起因するものであり、宮良はオモロの詞章を首里方言風に（首里方言の転訛のメカニズムに沿って、オモロ本文を変化させて）音読しようとし、台北はオモロ詞章を解釈し、実際の首里方言を当てて音読しようとしたという相違点を、本稿で明らかにすることができた。

**キーワード**：おもろさうし、音読表記、宮良当壮、比嘉盛章、台北おもろ研究会

#### Abstract

In Taiwan during the Japanese colonial era, study group of “*Omoro-Saushi*” was held, and research member wrote “*Omoro-saushi*” with Romaji notation. Linguist Tousou Miyara wrote “*Omoro-saushi*” with International Phonetic Alphabet in 1960. From the comparative study in this paper, it was found that there are differences between Miyara's article, which tried to write Omoro reading aloud, and the Taipei text, while having an approximate research attitude of reading in the Shuri dialect.

I compared “*Omoro-saushi*” written in Romaji notation with “*Omoro-saushi*” by the International Phonetic Alphabet, and clarified the differences between the two and their causes. The reason is that Miyara tried to read Omoro's verse aloud in the Shuri dialect style, and Taipei tried to interpret the Omoro verse and read it aloud by applying the actual Shuri dialect.

**Keywords**: Omoro-Saushi, Tousou Miyara, Taihoku Study Group of “Omoro-Saushi”

---

\* 名桜大学国際学群 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Faculty of International Studies, Meio University, 1220-1 Biimata, Nago, Okinawa 905-8585 Japan

## おもしろさうしの音読表記について

## はじめに

本稿は、宮良当壮による『おもしろさうし』の「音記」記事と、日本統治期台湾で開催されていた台北おもしろ研究会のテキストに収載されたオモロ音声表記の記録とを比較し、かつてのオモロ音読の有り様や方法等について検証するためのものである。

現在、那覇市首里で開かれているおもしろ研究会（平山良明代表）では、基本的に『おもしろさうし』に書かれてある通り音読される<sup>1</sup>。しかし、かつてはそうではなく、古琉球期の発音について、いわゆる三母音化は既に起きていたとする考え方や、もともと三母音であったとする立場など、明治期以降の琉球語・方言に近い発音であったと考える研究者が多く、首里方言的な音読がなされるなどといったこともなされていた。

『おもしろさうし』は戦前、田島利三郎によって研究の先鞭がつけられ（田島 1924）、伊波普猷（伊波 1924）、仲原善忠（仲原 1957）らによって引き継がれ、また、宮城真治（宮城 1972）、比嘉盛章（比嘉 1942）をはじめとする新オモロ学派等によって様々な視点からの研究が進められてきた。

伊波は、オモロの発音については後世にゆずるとし、その後、仲原や宮良、宮城、比嘉らによってオモロの発音が論じられた。しかし、実際に音声を表記する作業はほとんど公にされず、宮良当壮による『おもしろさうし』1巻から3巻までの国際音声字母を用いて発音を表記する試みがユニークな仕事として残された。

宮良以外でそのような試みを行った研究は公刊されていないが、戦前、台湾で開催されていた台北おもしろ研究会ではオモロの音読について検討が行われており、その検証の痕跡が研究会メンバーであった川平朝申所有のテキストに残されている（現在、那覇市歴史博物館に「川平家資料」として所蔵）。このテキストは刊行物ではないが、研究会で検討された成果とみられる書き込みがあり、台北おもしろ研究会における、おもしろさうしの音読についての考え方がうかがえる資料である。

宮良の表記と比較し異同を確認しながら、台北おもしろ研究会のオモロ音読法について解明を試みたい。

## オモロ音声表記比較 凡例

## 1. 宮良当壮「おもしろさうし」（音記）記事

- ・『月刊 琉球文学』（1960 私家版）および『宮良当壮全集 12』（1980 第一書房）を参照し記した。
- ・オモロ本文は、「一」「又」記号ではなく節番号（漢数字）を付しており、本稿ではそのまま記した。
- ・「音記」部分ではオモロ本文の節番号に該当する箇所算用数字を付してあるが、本稿では削除して記した。
- ・「音記」部分は国際音声字母（IPA）が用いられ、また複数箇所ハイフンが付されており、そのまま記した。
- ・オモロ本文には句読点、「音記」の該当箇所にはそれぞれコンマ、ピリオドが付されており、そのまま記した。

## 2. 台北おもしろ研究会テキスト（1940年 私家版）

- ・川平朝申資料（謄写版：那覇歴史博物館所蔵）を参照し記した。
- ・オモロ本文は、「一」「又」記号ではなく節番号（漢数字）を付しており、本稿ではそのまま記した。
- ・音声表記部分は、基本的にアルファベットを用いている他、「:」（IPA）や「o」（ローマ字）も使用しており、本稿ではそのまま記した。
- ・既出の語句については音声表記を略しており、本稿では比較検討のため省略部分を補って記した。なお、補い部分は丸かっこで示した。
- ・テキストには、研究会の成果と考えられる加筆、修筆した痕跡がみられ、本稿では音声表記に関しては適宜取り上げた。なお、加筆、修筆部分は斜体で示した。

以下、宮良テキストから本文、音読表記、台北おもしろ研究会テキストから音読表記を比較した。

使用している音声記号は異なるが、おおよそ発音に相違のある場合、「比較検討」でその旨示した。おおよそ相違がない場合については取り上げなかった。

また、すでに検討済みの詞章についてはいちいち取り上げなかった。ただし、前に比較した内容と統一的でない記述となっているなど、必要な場合は取り上げた。

「比較検討」についての考察は、末尾の「まとめと考察」に集約した。

なお、記述の便宜上、各行ごとに①、②、③、.、と行ナンパーを振った。「比較検討」では行ナンパーおよび当該詞章を示して検討結果を記した。

<sup>1</sup> かりまた 2014、間宮 2005によっても同様の主張がなされている。

比較検討

オモ口巻 1-1

宮 良	① あおりやへがふし	ʔo:re:-ga-Fuji
	② 一、きこゑ大ぎみぎや、	tʃikwi:-u:-zimi ʒa,
	③ おれて、あすび、よわれば	uriti asibi juwariba
	④ てにが、した、	tini ga ʃita,
	⑤ たいらげて、ちよわれ。	te:ragiti tʃuwari.
	⑥ 二、とよむせだかこが、	tujumu ʃidakaku ga,
	⑦ 三、しよりもりぐすく、	ʃuji-muji-gusiku,
	⑧ 四、まだまもりぐすく、	madama-muji-gusiku,
-----		
台 北	① あおりやへがふし	o:re:ga fushi
	② 一、聞得大君 <sup>が</sup> ぎや	chikui ufujin ga
	③ お降りて <sup>あそ</sup> 遊び <sup>よわ</sup> 祝れば	uriti asibi yuwariba
	④ <sup>てに</sup> 天 <sup>した</sup> が下	tiniga shicha
	⑤ <sup>たい</sup> 平 <sup>ちよ</sup> らげて 在われ	tairagiti chowari
	⑥ 二、豊む勢高子が	tuyumu shidakakuga
	⑦ 三、首里森城	shui muigusiku
	⑧ 四、真玉森城	mada muigusiku

①あおりやへがふし

- ・し：宮良は [ʃi] と [si]，台北は [shi] と [si] の記号を用い，ここでは宮良が [ʃi]，台北が [shi] で示している。

②きこゑ大ぎみぎや／聞得大君<sup>が</sup>ぎや

- ・き：宮良は [tʃi] と [tsi]，台北は [chi] と [tsi] の記号を用い，ここでは宮良が [tʃi]，台北が [chi] として，双方破擦音化させている。
- ・こゑ：宮良 [kwi:]，台北 [kui]。宮良は合拗音にし，台北は三母音化させている。

- ・大：宮良 [u:]，台北 [ufu]。宮良は [f] の音を残していない。

- ・み：宮良 [mi]，台北 [n]。宮良は母音残し，台北は母音脱落させている。

- ・が：宮良 [ʒa]，台北 [ga]。宮良は破擦音化 (g > ʒ) させ，台北は直音にしている。

④てにが，した／天<sup>てに</sup>が<sup>した</sup>下

- ・た (した)：宮良 [ta]，台北 [cha]。宮良は破擦音化させず，台北はさせている。

⑤たいらげて，ちよわれ／平<sup>たい</sup>らげて 在<sup>ちよ</sup>われ

- ・たい：宮良 [te:], 台北 [tai]。宮良は母音融合させ、台北はさせていない。
- ・ちよ：宮良 [tʃu], 台北 [cho]。いずれも拗音として  
いるが、宮良は三母音化させ、台北は三母音化させて  
いない<sup>2</sup>。

⑦しよりもりぐすく／首里森城

- ・り：宮良 [ji], 台北 [i]。宮良、台北ともに [r] を  
脱落させている。また、宮良は [u] の後の [i] につ  
いて半母音 [j] を加え台北はない。

⑧まだまもりぐすく／真玉森城

- ・まだま：宮良 [madama], 台北 [mada]。台北がミスか。

オモ口巻 1-2

宮 良	① あおりやへがふし	?o:re:-ga-Fuji
	② 一、きこゑ大ぎみぎや、	tʃikwi:-u:-zimi ʒa,
	③ おれて、あすび、よわれば	uriti asibi juwariba
	④ かみてだの、まぶりよわる、	kami-tida nu mabuji juwaru
	⑤ あんじおそい	azi-suji.
	⑥ 二、とよむせだかこが、	tujumu ʃidakaku ga,
	⑦ 三、しよりもりぐすく、	fuji-muji-gusiku,
	⑧ 四、まだまもりぐすく、	madama-muji-gusiku,
-----		
台 北	① あおりやへがふし	(o:re:ga fushi)
	② 一、聞得大君ぎや	(chikui ufujin ga)
	③ 降りて 遊び 祝れば	(uriti asibi) (yuwariba)
	④ 神太陽の 守り座る	kami tida nu <i>maburiyuru</i>
	⑤ 按司お添	<i>ajiusui</i>
	⑥ 二、豊む勢高子が	(tuyumu shidakakuga)
	⑦ 三、首里森城	(shui muigusiku)
	⑧ 四、真玉森城	(madama muigusiku)

④かみてだの まぶりよわる／神太陽の 守り座る

- ・かみてだ：宮良 [kami-tida], 台北 [kami tida]。宮  
良のハイフンから解釈<sup>3</sup>がうかがえる。

- ・よわる：宮良 [juwaru], 台北 [yoru]。宮良は三母音  
化させている。台北は三母音化させずに [わ] の音を  
脱落させている。

<sup>2</sup> 仲宗根政善は現代琉球語に残る「おはる」について、「misoojun」(めしおはる。召し給う)、「imoojun」(いみおはる。いらっしやる)を挙げている(仲宗根 1987: p.262)。これらの事例によれば台北の「chowari」は「choori」とすべき。また、琉歌では「チュワリ」と音読されることもある(島袋・翁長 1977 [1968]: p.107)。

<sup>3</sup> 「かみてだ」を、一続きの語と解釈するか、「かみ」と「てだ」に分けて解釈するか、少なくとも2パターンある。宮良は一続きで解釈していると考えられる。

⑤あんじおそい／按司お添

・あんじおそい：宮良 [aʒi-suji], 台北 [ajiusui]。双

方とも「ん」は脱落させている。また宮良は「お」も脱落させており、台北は [u] と三母音化させている。

オモ口巻 1 - 3

宮  
良

- |   |               |                             |
|---|---------------|-----------------------------|
| ① | あおりやへがふし      | ?o:re:-ga-Fuʒi              |
| ② | 一、きこゑ大ぎみぎや、   | tʃikwi:-u:-zimi ʒa,         |
| ③ | 世そう、せぢ、みおやせば、 | ju:so: ʃiʒi mi-ʔwe:ʃiwa     |
| ④ | 千万、世、そわて、ちよわれ | ʃim-maŋ ju: suwati tʃuwari. |
| ⑤ | 二、とよむせだかこが、   | tujumu ʃidakaku ga,         |
| ⑥ | 三、きこゑあんじおそい   | tʃikwi: adʒi-suji,          |
| ⑦ | 四、とよむあんじおそい   | tujumu adʒi-suji,           |
| ⑧ | 五、首里もりぐすく、    | ʃuʒi-muʒi-gusiku,           |
| ⑨ | 六、まだまもりぐすく、   | madama-muʒi-gusiku,         |
| ⑩ | 七、大ぎみす、まぶらめ。  | u:-zimi si maburami.        |

台  
北

- |   |             |                               |
|---|-------------|-------------------------------|
| ① | あおりやへがふし    | (o:re:ga fushi)               |
| ② | 一、聞得大君ぎや    | (chikui ufujin ga)            |
| ③ | 世襲ふ勢治 見食せば  | yu su: shiji / mi uyashiba    |
| ④ | 千万世 副はて 在われ | shin man yu: / suwati chowari |
| ⑤ | 二、豊む勢高子が    | (tuyumu shidakakuga)          |
| ⑥ | 三、聞得按司お添    | chikui anji usui              |
| ⑦ | 四、豊む按司お添    | tuyumu anji usui              |
| ⑧ | 五、首里森城      | (shui muigusiku)              |
| ⑨ | 六、真玉森城      | (madama muigusiku)            |
| ⑩ | 七、大君す 守らめ   | ufujin si maburami            |

- ③世そう、せぢ、みおやせば／世襲ふ勢治 見食せば  
 ・そう：宮良 [so:], 台北 [su:]。宮良は三母音化させ、台北はさせていない。  
 ・おや：宮良 [ʔwe:], 台北 [uya]。宮良は母音・半母音を融合させ台北はさせていない<sup>4</sup>。  
 ・ば（みおやせば）：宮良 [wa], 台北 [ba]。宮良は濁音を無視（本文は濁音表記）。
- ④千万、世、そわて、ちよわれ／千万世 副はて 在われ

- ・ちよ：宮良 [tʃu], 台北 [cho]。宮良は三母音化させ、台北はさせていない。  
 ⑥・⑦きこゑあんじおそい・とよむあんじおそい／聞得按司お添・豊む按司お添  
 ・あんじおそい：宮良 [adʒi-suji], 台北 [anji usui]。宮良は「ん」が脱落。台北は1-2では「ん」が脱落しているが、ここでは採用しており不統一<sup>5</sup>。

## オモロ巻 1-4

宮良	①	あおりやへがふし	ʔo:re-ga-Fuji
	②	一、きこゑ大ぎみぎや、	tʃikwi:-u:-zimi ʒa,
	③	てにの、いのり、しよわれば、	tini nu inuji ʃiwariba (or wa)
	④	てるかはも、ほこて、	tirukawan ʃukuti
	⑤	おぎやかもいに、	uzakamuji ni
	⑥	かざりうちへ、みおやせ	kazaji uttʃi miʔwe:ʃi.
	⑦	二、とよむせだかこが、	tujumu ʃidakaku ga,
台北	①	あおれやへがふし	(o:re:ga fushi)
	②	一、聞得大君ぎや	(chikui ufujin ga)
	③	天の祈り 為座れば	tini nu inuri / sho:riba
	④	天神も誇て	tiru kawan fukuti
	⑤	我が大王に	ujya kami: ni
	⑥	飾り加へて 見食せ	kazai wuchi / miuyashi
	⑦	二、豊む勢高子が	(tuyumu shidakakuga)

- ③てにの、いのり、しよわれば／天の祈り 為座れば  
 ・り：宮良 [ji], 台北 [ri]。宮良は子音 [r] の脱落、台北はさせていない。  
 ・しよわれば：宮良 [ʃiwariba], 台北 [sho:riba]。宮良

- は「よ」を脱落させ、台北は「わ」を融合させている。  
 ⑤おぎやかもいに／我が大王に  
 ・もい：宮良 [muji], 台北 [mi:]。いずれも三母音化させ、宮良は母音融合をさせず台北は母音融合させている。

<sup>4</sup> 「おや」は現代琉球語では、例えば「親-」（例：親方）であれば [ʔwe-] と発音され、単独もしくは「-親」（例：母親）であれば [-uja] と発音される。宮良は語頭の「おや-」と考え、台北は語中の「-おや-」と考えたか。

<sup>5</sup> オモロ本文表記には「あぢ」と「あんじ」があり、高橋俊三は「長音が鼻音化したもの」の事例として「あんじ」を挙げている（高橋 1991: p.69。なお、高橋は「『あち』のほうが古い形であろう」という意見に従うと）と注記している。

- ⑥かざりうちへ、みおやせ／飾り加へて 見食せ  
 ・り：宮良 [ji], 台北 [i]。  
 ・うちへ：宮良 [uttʃi], 台北 [wuchi]。いずれも三母音化させている。なお宮良のみ促音表記（ただし台

北の本文は [ちちへ] に傍線し「ツチ」とあり促音と認識していた痕跡あり）。

- ・みおやせ：宮良 [miʔwe:ʃi], 台北 [miuyashi]。宮良は母音融合をさせ台北は母音融合させていない。

オモロ巻 1 - 5

宮 良	① あおりやへがふし	ʔo:re:-ga-Fuʃi
	② 一、きこゑ大ぎみぎや、	tʃikwi:-u:-zimi ʒa,
	③ あけの、よろい、	aki nu juruji
	④ めしよわちへ、	mifuwatʃi
	⑤ かたな、うちい、	katana utʃi,
	⑥ ぢやくに、とよみよわれ	ʒakuni tujumi juwari.
	⑦ 二、とよむせだかこが、	tujumu ʃidakaku ga,
	⑧ 三、月しろは、さだけて	tsitʃi-ʃiru wa sadagiti,
	⑨ 四、物しりは、さだけて	munu-ʃiji wa sadagiti,
-----		
台 北	① あおりやへがふし	(o:re:ga fushi)
	② 一、聞え大君が	(chikui ufujin ga)
	③ 赤の式衣	akinu yurui
	④ 召し座ちへ	mishōchi
	⑤ 刀御吊り	katana uchii
	⑥ 我が国 豊み祝れ	dyakuni / tuyumi yuwari
	⑦ 二、豊む勢高子が	(tuyumu shidakakuga)
	⑧ 三、月知るは魁けて	tsichi shiru wa sadakiti
	⑨ 四、物知りは魁けて	munu shiri wa sadakiti

- ④めしよわちへ／召し座ちへ  
 ・めしよわちへ：宮良 [mifuwatʃi], 台北 [mishōchi]。  
 宮良は三母音化させ、台北は母音融合させている。  
 ⑤かたな、うちい／刀御吊り

・うちい：宮良 [utʃi], 台北 [uchii]。宮良は末尾の「い」を脱落させている。

- ⑧月しろは、さだけて／月知るは魁けて  
 ・さだけて：宮良 [sadagiti], 台北 [sadakiti]。宮良本



文は「さだけて」。

⑨物しりは、さだけて／物知りは魁けて

・物しり：宮良 [munu-fiji], 台北 [munu shiri]。宮良

は [r] を脱落させ半母音発生させている。台北は [r]  
脱落なし。

オモ口巻 1 - 6

宮  
良

- |   |                |                         |
|---|----------------|-------------------------|
| ① | あおりやへがふし       | ʔo:re:-ga-Fuji          |
| ② | 一、きこゑ大ぎみぎや     | tʃikwi:-u:-zimi ʒa,     |
| ③ | かぐらゑか、とりよわちへ、  | Kagura-ika tuji juwatʃi |
| ④ | あんじおそいす        | adʒi-suji si            |
| ⑤ | ともゝすへ、ちよわれ     | tumumu-si: tʃuwari.     |
| ⑥ | 二、とよむせだかこが     | tujumu ʃidakaku ga,     |
| ⑦ | 三、てるかはと、よきやて   | tirukawa tu jutʃati,    |
| ⑧ | 四、てるしのと、よきやて   | tirufinu tu jutʃati,    |
| ⑨ | 五、首里もりぐすく      | ʃuji-muji-gusiku,       |
| ⑩ | おれて、おれふさよわ     | uriti, uri-Fusajuwa     |
| ⑪ | 六、まだまもりぐすく     | madama-muji-gusiku,     |
| ⑫ | 七、ききやの、うきしま    | tʃitʃa nu utʃi-ʃima     |
| ⑬ | ききやの、やけしま      | tʃitʃa nu jaki-ʃima     |
| ⑭ | 八、首里もりぐすく、     | ʃuji-muji-gusiku        |
| ⑮ | 世がけにせ、あんじおそい   | ju-gaki-niʃi adʒi-suji, |
| ⑯ | 九、まだまもりぐすく、    | madama-muji-gusiku,     |
| ⑰ | おそいにせ、あんじおそい   | usuji-niʃi adʒi-suji,   |
| ⑱ | 一〇、きこゑあんじおそいや、 | tʃikwi: adʒi-suji ja,   |
| ⑲ | かぐらぎやめ、とよで     | kagurazami tujudi       |
| ⑳ | 一一、とよむあんじおそいや、 | tujumu adʒi-sujija      |
| ㉑ | おぼつぎやめ、とよで     | ubutsi ʒami tujudi,     |

台北	①	-----	(o:re:ga fushi)
	②	一、聞え大君が	(chikui ufujin ga)
	③	神座吉日 取り祝ちへ	kagura eka tuiyuwachi
	④	按司おすひす	anji usui si
	⑤	十百末在れ	tumumu sii chowari
	⑥	二、豊む勢高子が	(tuyumu shidakakuga)
	⑦	三、天神と行逢て	-----
	⑧	四、地祇と行逢て	<i>tirushinu tu yuchati</i>
	⑨	五、首里森城	(shui muigusiku)
	⑩	降りて降り副よわ	-----
	⑪	六、真玉森城	(madama muigusiku)
	⑫	七、喜界の浮島	chicha nu uchishima
	⑬	喜界の焼島	chicha nu yakishima
	⑭	八、首里森城	(shui muigusiku)
	⑮	世掛け二才按司おそひ	yugaki nishi anjiusui
	⑯	九、真玉森城	(madama muigusiku)
	⑰	襲ひ二才按司おそひ	usui nishi anjiusui
	⑱	一〇、聞得按司おそひや	(chikui anji usui)
	⑲	神座まで豊で	kagura gyami tuyudi
	⑳	一一、豊む按司おそひや	(tuyumu anji usui)
	㉑	御仏まで豊で	ubutsi gyami tuyudi

③かぐらゑか、とりよわちへ／神座吉日 取り祝ちへ  
 ・ゑか：宮良 [ika], 台北 [eka]。宮良は三母音化させ、  
 台北は三母音化させていない。

⑤ともゝすへ、ちよわれ／十百末在れ  
 ・ちよわれ：宮良 [tjɯwari], 台北 [chowari]。宮良は

三母音化させ、台北は「ちよ」は三母音化させずに「れ」  
 は三母音化させている。

⑩おれて、おれふさよわ／降りて降り副よわ  
 ・台北に表記なく比較不可。

⑱・㉑かぐらぎやめ、とよで・おぼつぎやめ、とよで／

神座まで豊で・御仏まで豊で

- ・ぎやめ：宮良 [ɟami], 台北 [gyami]。宮良は破擦音化 (g > ɟ) させている。

## オモ口巻 1-7

宮 良	①	あおりやへがふし	ʔo:re:-ga-Fuji
	②	一、きこゑ大ぎみぎや	tʃikwi:-u:-zimi ɟa,
	③	とたけ、まさり、よわちへ、	dudaki masaji juwatʃi
	④	みれども、あかぬ、	miriduŋ akaŋ
	⑤	首里おや国	ʃuji-ʔwe:-guni
	⑥	二、とよむせだかこが	tujumu ʃidakaku ga,
	⑦	三、首里もりぐすく	ʃuji-muji-gusiku,
	⑧	四、まだまもりぐすく	madama-muji-gusiku,
-----			
台 北	①	あおりやへがふし	(o:re:ga fushi)
	②	一、きこえ大君が	(chikui ufujin ga)
	③	十嶽勝り祝ちへ	tutaki masai yuwachi
	④	見れども飽かぬ	miridumu akan
	⑤	首里親国	shui guni
	⑥	二、豊む勢高子が	(tuyumu shidakakuga)
	⑦	-----	(shui muigusiku)
	⑧	-----	(madama muigusiku)

③とたけ、まさり、よわちへ／十嶽勝り祝ちへ

- ・とたけ：宮良のdudakiのdaの下に (ʔ) が示されている。本文表記は清音であるのに濁音としている。
- ・り(まさりよわちへ)：宮良 [masaji juwatʃi], 台北 [masai yuwachi]。宮良 [jɟ], 台北 [i]。宮良、台北ともに [r] を脱落させている。

④みれども、あかぬ／見れども飽かぬ

- ・みれども あかぬ：宮良 [miriduŋ akaŋ], 台北 [miridumu akan]。宮良は「も」および「ぬ」双方とも撥音便とし、台北は「ぬ」を撥音便としている。
- ⑤首里おや国／首里親国
  - ・台北は「shui」と「guni」の間に記載なし。

オモロ巻 1-8

宮 良	① あおりやへがふし	ʔo:re:-ga-Fuʃi
	② 一、きこゑ大きみぎや	tʃikwi:-u:-zimi ʒa,
	③ けよの、せぢ、やりよわば、	tʃu:nu ʃidʒi jajuwaba
	④ しま、まるく、	ʃima maruku,
	⑤ みこゑしやり、おそわ	mikwi: ʃaji usuwa.
	⑥ 二、とよむせだかこが	tujumu ʃidakaku ga,
	⑦ 三、首里もりぐすく	ʃuji-muji-gusiku,
	⑧ 四、まだまもりぐすく	madama-muji-gusiku,
-----		
台 北	① あおりやへがふし	(o:re:ga fushi)
	② 一、聞え大君が	(chikui ufujin ga)
	③ 京の勢治遣り祝ば	kyo nu shiji yariyuwaba
	④ 島丸く	shima maruku
	⑤ 美声しやり襲わ	mikwii shai usuwa
	⑥ 二、とよむせだかこが	(tuyumu shidakakuga)
	⑦ 三、首里もりぐすく	(shui muigusiku)
	⑧ 四、まだまもりぐすく	(madama muigusiku)

③けよの、せぢ、やりよわば／京の勢治遣り祝ば  
 ・けよの：宮良 [tʃu:nu]，台北 [kyo nu]。宮良は三母音化および破擦音化させ、台北はいずれもないが、[kyo] と短くしている。誤記か。  
 ・り（せぢ やりよわば）：宮良 [jajuwaba]，台北

[yariyuwaba]。宮良は「り」を脱落させ、台北は [ri] 残している。  
 ⑤みこゑしやり、おそわ／美声しやり襲わ  
 ・り（しやり）：宮良は [r] 脱落させ [ji]，台北は [r] 脱落させ [i]。

オモロ巻 1-9

宮 良	① あおりやへがふし	ʔo:re:-ga-Fuʃi
	② 一、きこゑ大きみぎや	tʃikwi:-u:-zimi ʒa,

- ③ おれて、おれ、ふさよわちへ、 uriti, uri Fusajuwatfi  
 ④ ようそろいて、 ju: suruti  
 ⑤ おぎやかもいに、みおやせ、 uzakamuji ni mi-?we:fi.  
 ⑥ 二、とよむせだかこが tujumu fidakaku ga,  
 ⑦ 三、首里もりぐすく fuji-muji-gusiku,  
 ⑧ 四、まだまもりぐすく madama-muji-gusiku,

台北

- ① あおりやへがふし (o:re:ga fushi)  
 ② 一、聞え大君が (chikui ufujin ga)  
 ③ 降りて降り副座ち uriti urifusayuwati  
 ④ 世揃へて yūu suriti  
 ⑤ 我が英主に見食せ ujha kamī ni miuyashi  
 ⑥ 二、とよむせだかこが (tuyumu shidakakuga)  
 ⑦ 三、首里もりぐすく (shui muigusiku)  
 ⑧ 四、まだまもりぐすく (madama muigusiku)

③おれて、おれ、ふさよわちへ／降りて降り副座ち  
 ・ちへ：宮良 [tʃi], 台北 [ti]。宮良は「ふさひ-おわし  
 て」（「ふさよわちへ」の元の語形）の「して」を融合  
 させている。台北は「し」を脱落させている。  
 ④ようそろいて／世揃へて

・そろいて：宮良 [suruti], 台北 [suriti]。  
 ⑤おぎやかもいに、みおやせ／我が英主に見食せ  
 ・台北は「uja kamī」とあり欄外に線を引き「j」と「a」  
 の間に「h」が挿入されている。

オモ口巻 1-10

宮良

- ① きこゑたうやまがふし tʃikwi: to:jama-ga-Fuji.  
 ② 一、きこゑ大ぎみぎや tʃikwi:-u:-zimi za,  
 ③ いくさ、せぢ、みおやせ、 ikusa-fiʒi mi-?we:fi.  
 ④ 二、とよむせだかこが tujumu fidakaku ga,  
 ⑤ 三、きこゑあんじおそいや tʃikwi: adʒi-suji ja,

	⑥ 四、とよむあんじおそいや	tujumu adʒi-suji ja,
台 北	① きこゑたうやまがふし	—
	② 一、聞え大君が	(chikui ufujin ga)
	③ 戦勢治美食せ	ikusa shiji miuyashi
	④ 二、とよむせだかこが	(tuyumu shidakakuga)
	⑤ 三、きこゑあんじおそいや	(chikui anji usui)
	⑥ 四、とよむあんじおそいや	(tuyumu anji usui)

①きこゑたうやまがふし／きこゑたうやまがふし (くさせちみおやせがふし) を書き入れている。  
 ・台北は節名を見せ消しし、1-12の節名(大ぎみがい)

オモロ巻 1-11

宮 良	① あおりやへがふし	?o:re:-ga-Fuji
	② 一、きこゑ大ぎみぎや	tʃikwi:-u:-zimi ʒa,
	③ とももさに、しちへ、ちよわれ	tumumu sani-ʃitʃi tʃuwari.
	④ 二、とよむせだかこが	tujumu ʃidakaku ga,
	⑤ 三、首里もりぐすく	ʃuji-muji-gusiku,
	⑥ 四、まだまもりぐすく	madama-muji-gusiku,
台 北	① あおりやへがふし	(o:re:ga fushi)
	② 一、聞え大君が	(chikui ufujin ga)
	③ 十百歳に して在れ	tumumusa ni shichi chowari
	④ 二、とよむせだかこが	(tuyumu shidakakuga)
	⑤ 三、首里もりぐすく	(shui muigusiku)
	⑥ 四、まだまもりぐすく	(madama muigusiku)

③とももさに しちへ ちよわれ／十百歳に して在れ  
・とももさに しちへ：宮良 [tumumu sani-ʃitʃi], 台

北 [tumumusa ni shichi]。スペースの位置の相違およびハイフンから、それぞれの解釈がうかがえる<sup>6</sup>。

## オモ口巻 1-12

宮 良	①	大ぎみがいくさせち-	u:-zimi ga ikusa-ʃidʒi
	②	-みおやせがふし	mi-ʔwe:ʃi-ga-Fuʃi
	③	一、きこゑ、たうやまに、	tʃikwi: to:jama ni,
	④	おおぎみぎや、けやりよわ、	u:-zimi ʒa kijajijuwa
	⑤	二、とよむたうやまに、	tujumu to:jama ni,
	⑥	三、せるましの、くひしに	ʃirumafʃi nu kwi:ʃi ni
	⑦	四、しまじりの、いくさに	ʃima-ʒiri nu ikusa ni,
-----			
台 北	①	大ぎみがいくさせち-	——
	②	-みおやせがふし	——
	③	一、聞え当山に	chikui toyama ni
	④	大君が蹴遣り座ち	ufujin ga kiyaryowachi
	⑤	二、豊む当山に	——
	⑥	三、神酒の乞ひしに	——
	⑦	四、島尻のいくさに	shimajiri nu ikusani

①大ぎみがいくさせちみおやせがふし／大ぎみがいくさせちみおやせがふし  
・紙幅の都合上、節名を2つに分けて記載した。  
・台北は節名を見せ消しし、1-12の節名（きこゑたうやまがふし）を書き入れている。

④おおぎみぎや、けやりよわ／大君が蹴遣り座ち  
・けやりよわ：宮良 [kijajijuwa], 台北 [kiyaryowachi]。  
宮良は子音 [r] の脱落および三母音化させ、台北は「よ」を拗音（三母音化なし）とし、「ち」を付けたしている。

## オモ口巻 1-13

宮 良	①	あおりやへがふし	ʔore:-ga-Fuʃi
	②	一、きこゑ大ぎみぎや	tʃikwi:-u:-zimi ʒa,

<sup>6</sup> [tumumu sani-ʃitʃi] (宮良) は「十百、算して」、[tumumusa ni shichi] (台北) は「十百歳にして」と解釈される。現在の解釈は前者が一般的である。

照屋 理：おもろさうしの音読表記について

- |   |               |                         |
|---|---------------|-------------------------|
| ③ | かいなでわる、たゝみきよ、 | ke:nadiwaru tatamitfu,  |
| ④ | かほうよる、        | kaFu: juru              |
| ⑤ | みやかの、もり、ちよわれ、 | mja:ka nu muji tfuwari. |
| ⑥ | 二、とよむせだかこが、   | tujumu fidakaku ga,     |
| ⑦ | 三、首里もりちよわる、   | fuji-muji tfuwaru,      |
| ⑧ | 四、まだまもりちよわる、  | madama-muji tfuwaru,    |

台北

- |   |           |                      |
|---|-----------|----------------------|
| ① | あおりやへがふし  | (o:re:ga fushi)      |
| ② | 一、聞え大君が   | (chikui ufujin ga)   |
| ③ | 搔撫で座る国君父  | kēnadiwaru tadamichu |
| ④ | 加豊寄る      | —                    |
| ⑤ | 中の森在れ     | —                    |
| ⑥ | 二、豊むせだかこが | (tuyumu shidakakuga) |
| ⑦ | 三、首里もり在る  | (shui mui) —         |
| ⑧ | 四、真玉森在る   | (madama mui) —       |

③かいなでわる、たゝみきよ／搔撫で座る国君父  
・たゝみきよ：宮良 [tatamitfu], 台北 [tadamichu]。

台北は濁音にしている。またテキストに「肉親ノ関係」  
(右傍), 「ち〃んきゅ」(左傍)と注書きあり。

オモロ巻 1-14

宮良

- |   |              |                     |
|---|--------------|---------------------|
| ① | あおりやへがふし     | ?o:re:-ga-Fuji      |
| ② | 一、きこゑ大ぎみぎや   | tfikwi:-u:-zimi za, |
| ③ | いのり、たてまつれば、  | inuji tatimatsiriba |
| ④ | まん、まん、       | mam man             |
| ⑤ | あすら、まん、ちよわれ、 | asira man tfuwari.  |
| ⑥ | 二、とよむせだかこが、  | tujumu fidakaku ga, |



- |       |             |                                 |
|-------|-------------|---------------------------------|
| ⑦     | 三、首里もりぐすく、  | fuji-muji-gusiku,               |
| ⑧     | 四、まだまもりぐすく、 | madama-muji-gusiku,             |
| ----- |             |                                 |
| 台北    | ①           | あおりやへがふし (o:re:ga fushi)        |
|       | ②           | 一、聞え大君が (chikui ufujin ga)      |
|       | ③           | 祈り奉れば inuri tatimatsiriba       |
|       | ④           | 万々 man man                      |
|       | ⑤           | 民衆 万在れ asira man chuware        |
|       | ⑥           | 二、とよむせだかこが (tuyumu shidakakuga) |
|       | ⑦           | 三、首里もりぐすく (shui muigusiku)      |
|       | ⑧           | 四、まだまもりぐすく (madama muigusiku)   |

③いのり、たてまつれば／祈り奉れば

- ・いのり：宮良 [inuji], 台北 [inuri]。宮良は [r] 脱落させ、台北は脱落なし。
- ・たてまつれば：宮良 [tatimatsiriba] とし、[ba] の下に [or wa] と傍書あり<sup>7</sup>。

⑤あすら、まん、ちよわれ／民衆 万在れ

- ・ちよ：宮良 [tʃu], 台北 [chu]。いずれも拗音、三母音化させている。台北は 1 - 1 等で三母音化させておらず不統一（以降同）。

## オモ口巻 1 - 15

宮良

- |       |             |                     |
|-------|-------------|---------------------|
| ①     | あおりやへがふし    | ʔo:re:-ga-Fuʃi      |
| ②     | 一、きこゑ大ぎみぎや  | tʃikwi:-u:-zimi ʒa, |
| ③     | せぢ、だか、      | ʃidʒi-daka          |
| ④     | うちやがて、ちよわれ、 | utʃagati tʃuwari.   |
| ⑤     | 二、とよむせだかこが、 | tujumu ʃidakaku ga, |
| ----- |             |                     |

台北

- |   |          |                    |
|---|----------|--------------------|
| ① | あおりやへがふし | (o:re:ga fushi)    |
| ② | 一、聞え大君が  | (chikui ufujin ga) |

<sup>7</sup> 接続助詞の「ば」は、現代琉球語においては前の語と融合して発音されており、[wa] か [ba] か不明である。なお、『おもろさうし』のように濁点をつけない表記では、ワと発音されたか、バと発音されたか判断しにくい」ともされる（沖縄古語大辞典編集委員会 [編] 1995: p.530）。

- |   |            |                      |
|---|------------|----------------------|
| ③ | 敷大屋が       | shichi ufuya ga      |
| ④ | 浮上て在れ      | uchagati chuwari     |
| ⑤ | 二、豊むせだかこが、 | (tuyumu shidakakuga) |

③せぢ、だか／敷大屋が 底本異なる。  
 ・台北「せぢ 大やが (せぢだか伊波本)」と傍書あり。

オモロ巻 1 - 16

- |        |   |               |                         |
|--------|---|---------------|-------------------------|
| 宮<br>良 | ① | あおりやへがふし      | ?o:re:-ga-Fuji          |
|        | ② | 一、きこゑ大ぎみぎや    | tʃikwi:-u:-zimi ʒa,     |
|        | ③ | 首里もり、おれわちへ、   | fujī-muji uri-watʃi,    |
|        | ④ | おぎやかもいや、      | uzaka-muji ja,          |
|        | ⑤ | きみしよ、まぶりよわめ、  | tʃimi ju mabuji juwami. |
|        | ⑥ | 二、とよむせだかこが、   | tujumu ʃidakaku ga,     |
|        | ⑦ | まだまもりおれわちへ    | madama-muji uri-watʃi   |
|        | ⑧ | 三、さしぶ、てるくもに、  | safibu tirukumu ni      |
|        | ⑨ | おれ、なおちへ、からは、  | uri no:tʃi karawa,      |
|        | ⑩ | 四、さしぶ、てるきしやけ、 | safibu tiru tʃiʃaki,    |
|        | ⑪ | おれふさて、からは、    | uri Fusati karawa,      |
|        | ⑫ | 五、てるかはと、      | tirukawa tu             |
|        | ⑬ | とこゑ、やり、かわちへ、  | tukwi: jaji kawatʃi,    |
|        | ⑭ | 六、てるしのと、      | tiruʃinu tu             |
|        | ⑮ | ゑりぢよ、やりかわちへ、  | ijizu jaji kawatʃi,     |
|        | ⑯ | 七、てるかはも、ほこて   | tirukawan Fukuti.       |
|        |   |               |                         |
| 台<br>北 | ① | あおりやへがふし      | (o:re:ga fushi)         |

- |             |                       |
|-------------|-----------------------|
| ② 一、聞え大君が   | (chikui ufujin ga)    |
| ③ 首里森降り在ち   | (shui mui) ——         |
| ④ わが大王や     | ——                    |
| ⑤ 君しよ守り在め   | ——                    |
| ⑥ 二、とよむ勢高子が | (tuyumu shidakakuga)  |
| ⑦ 真玉森降り在ち   | (madama mui) ——       |
| ⑧ 三、さしぶ照る雲に | sashibu tirukumuni    |
| ⑨ 降り直ちからは   | urinawōchi karawa     |
| ⑩ 四、さしぶ照る后  | sashibutiru chishachi |
| ⑪ 降り副てからは   | urifusati karawa      |
| ⑫ 五、天神と     | ——                    |
| ⑬ 渡声やり交ち    | ——                    |
| ⑭ 六、地祇と     | ——                    |
| ⑮ 座所やり交ち    | ——                    |
| ⑯ 七、天神も誇て   | ——                    |

- ⑨おれ、なおちへ、からは／降り直ちからは  
 ・なお：宮良 [no:tʃi], 台北 [nawōchi]。宮良は母音融合させ、台北は融合させていない。  
 ⑩さしぶ、てるきしやけ／さしぶ照る后

・きしやけ：宮良 [tʃiʃaki], 台北 [chishachi]。「け」について、宮良は三母音化させ、台北は三母音化させ更に破擦音化まで進めている。

オモ口巻 1-17

- |        |                |                        |
|--------|----------------|------------------------|
| 宮<br>良 | ① あおりやへがふし     | ʔo:re:-ga-Fuji         |
|        | ② 一、きこゑ大ぎみぎや   | tʃikwi:-u:-zimi ʒa,    |
|        | ③ せぢとよみ、せ、いくさ、 | ʃidʒi tujumi ʃi-ikusa, |
|        | ④ しま、うちの、とよみ   | ʃima-utʃi nu tujumi.   |

- |   |                 |                        |
|---|-----------------|------------------------|
| ⑤ | 二、とよむせだかこが、     | tujumu fidakaku ga,    |
| ⑥ | せぢとよみ、せいくさ      | fidzi tujumi fi-ikusa, |
| ⑦ | 三、きこゑあんじおそいぎや   | tʃikwi: adzi-suji za   |
| ⑧ | せぢとよみ、いくさ       | fidzi tujumi ikusa,    |
| ⑨ | 四、とよむあんじおそいぎや   | tujumu adzi-suji za    |
| ⑩ | せぢとよみいくさ        | fidzi tujumi ikusa,    |
| ⑪ | 五、ゑそこ、かよわ、ぎやめ、  | isuku kajuwa zami,     |
| ⑫ | せぢ、やり、やりおそう     | fidzi jaji-jaji uso:   |
| ⑬ | 六、みおうね、かよわ、ぎやめ、 | mi-u:ni kajuwa zami    |
| ⑭ | せぢ、やり、やりおそは     | fidzi jaji-jaji usuwa  |
| ⑮ | 七、せ、いくさ、おしたてば   | fi-ikusa ufi-tati wa   |
| ⑯ | けおやり、やしまぶら      | tʃu: jaji-jaji mabura  |
| ⑰ | 八、せ、ひやく、おしたてば、  | fi-Fjaku ufi-tatiwa    |
| ⑱ | けおやり、やり、まぶら     | tʃu: jaji-jaji ma-bura |
| ⑲ | 九、だしきや、うちくき     | dafitʃa utʃi-kuʒi      |
| ⑳ | ちや、はれ、まわらし      | tʃa Fari mawaraʃi,     |

台北

- 
- |   |            |                       |
|---|------------|-----------------------|
| ① | あおりやへがふし   | (o:re:ga fushi)       |
| ② | 一、聞え大君が    | (chikui ufujin ga)    |
| ③ | 勢治とよみ勢軍    | shiji tuyumi shiikusa |
| ④ | 島内のとよみ     | shimauchi nu tuyumi   |
| ⑤ | 二、とよむ勢高子が  | (tuyumu shidakakuga)  |
| ⑥ | -----      | -----                 |
| ⑦ | 三、聞え按司おそひが | (chikui anji usui ga) |
| ⑧ | -----      | -----                 |

⑨ 四、とよむ按司おそひが	(tuyumu anji usui ga)
⑩ -----	-----
⑪ 五、舟通は迄	yisuku kayuwajhami
⑫ 勢治やりやりおそふ	-----
⑬ 六、み舟通は迄	mifuni kayuwajhami
⑭ -----	-----
⑮ 七、勢軍押し立てば	shiikusa ushitatiba
⑯ 京遣りやり守ら	kyu yai yaimabura
⑰ 八、勢兵士押し立てば	shihyaku ushitatiba
⑱ -----	-----
⑲ 九、ダシキャ打釘	dashicha uchikuji
⑳ 常走り廻らせ	cha farimārashi

⑦・⑨きこゑあんじおそいぎや・とよむあんじおそいぎや／聞え按司おそひが・とよむ按司おそひが  
 ・ぎや：宮良 [3a], 台北 [ga]。宮良は破擦音化させ、台北は直音にしている。  
 ⑮せ、いくさ、おしたてば／勢軍押し立てば  
 ・おしたてば：宮良 [uʃi-tati wa], 台北 [ushitatiba]。宮良は「ば」をwaとしている。また、⑰では[uʃi-tatiwa]としてハイフンが入ってない。  
 ⑯けおやり、やりまぶら／京遣りやり守ら  
 ・けお：宮良 [tʃu:], 台北 [kyu]。宮良は破擦音化させ、台北は三母音化させている。

⑰せ、ひやく、おしたてば／勢兵士押し立てば  
 ・おしたてば：宮良 [uʃi-tatiwa], 台北 [ushitatiba]。宮良は「ば」をwaとしている。  
 ⑱けおやり、やり、まぶら／京遣りやり守ら  
 ・まぶら：宮良 [ma-bura], 台北 [mabura]。宮良は⑯では [mabura] としてハイフンを入れておらず、[ma-bura] は誤記と思われる。  
 ⑳ちや、はれ、まわらし／常走り廻らせ  
 ・まわらし：宮良 [mawaraʃi], 台北 [mārashi]。宮良は [wa] 残し、台北は [w] 脱落させ母音融合させている。  
 (以下、1-29まで欠)

オモ口巻 1-29

宮 良	① 大ぎとのげすの、-	u:zatu nu gisi nu
	② -おもいあんじぎやふし	umui adzi gja Fuji
	③ 一、よなはばま、	junaFa-bama
	④ きこゑ大ぎみ、	tʃikwi:-u:zimi

⑤	やぢよ, かけて,	jadʒu kakiti
⑥	とよまさに	tujumasa ni
⑦	二, あきりぐち,	atʃiri gutʃi
⑧	とよむ大ぎみ, やぢよ	tujumu u:ʒimi
⑨	三, ばてん, ばま,	batim-bama
⑩	きこゑ, てるきみ, やぢよ	tʃikwi: tiru-tʃimi jadʒu,
⑪	四, あからかさ,	akarakasa
⑫	もゝと, ふみあがり, やぢよ,	mumutu Fumijagari jadʒu,

台北

①	大里の下司-	-----
②	-思ひ按司がふし	-----
③	一, 与那覇浜	Yunafa bama
④	聞え大君	chikui ufujin
⑤	島かけて	yaju kakiti
⑥	豊まさに	tuyumasani
⑦	二, あきり口	achiri guchi
⑧	豊む大君	tuyumu ufujin
⑨	三, 場天浜	batin bama
⑩	聞え照る君	chikui tiruchimi
⑪	四, あから嶽	akaradaki
⑫	百々年踏揚	mumutu fumiyagari

⑨ばてん, ばま／場天浜  
 ・ん:宮良 [batim-bama], 台北 [batin bama]。宮良は「ん」を [m] として逆行同化させている。

⑪あからかさ／あから嶽  
 ・宮良 [akarakasa], 台北 [akaradaki]。

⑫もゝと, ふみあがり／百々年踏揚  
 ・ふみあがり:宮良 [Fumijagari], 台北 [fumiyagari]。

宮良は [mi] と [a] の間に半母音 [j] を発生させ、台北は [mya] と母音と半母音を融合させている。

(1-30欠)

なお、1-31に2行のみ音声記号が付されているため、該当箇所のみを以下に示す。

## オモロ巻 1-31

宮 良	- --- (略) ---	-----
	① 三、いせゑけり、あんじおそい、	ifi-wikiji adzi-sui
	② あゆが、うちは、なげくな	aju-ga-utji wa nagikuna,
	- --- (略) ---	-----
-----		
台 北	- --- (略) ---	-----
	① 三、気丈な按司襲ひ	ijichiri anjiusui
	② 心の内は嘆くな	ayuga uchiwa najikuna
	- --- (略) ---	-----

## ①いせゑけり、あんじおそい／気丈な按司襲ひ

・いせゑけり:宮良 [ifi-wikiji], 台北 [ijichiri]。宮良は [r] 脱落, 三母音化させている。台北は類似の首里方言を載せている。

## ②あゆが、うちは、なげくな／心の内は嘆くな

・なげくな:宮良 [nagikuna], 台北 [najikuna]。宮良は三母音化させ、台北は三母音化させて、さらに破擦音化させている。

られる語句には「あおりやへ」、「こゑ (きこゑ, みこゑ)」、「たいらげて」、「すへ」、「おや」、「けよ」、「くひし」、「かいなでわる」、「なおちへ」などがある。これら全てで宮良では母音融合が認められ、台北は「あおりやへ」、「すへ」、「けよ」、「かいなでわる」に認められるが、「こゑ (きこゑ, みこゑ)」、「たいらげて」、「おや」、「くひし」、「なおちへ」については母音を融合させていない。

また「ふみあがり」、「よわれ (ちよわれ/しよわれ/とよみよわれ)」、「もい (おぎやかもい)」、「そろいて」は、宮良は母音を融合させておらず、台北は融合させており、統一的な記述となっていない。

## まとめと考察

宮良と台北について比較し、その異同等詳細について確認した。以下に比較検討の結果をまとめ、考察してみたい。

## 1. 母音について

## (1) 三母音

宮良、台北ともに基本的には三母音での表記をしている。しかし、特に台北に三母音でない例が見られ、不統一である。

本稿で対象としたオモロでは、1-1, 3, 6, 11, 13, 14, 15に「ちよわれ」が出て来るが、台北では1-1から1-11までは [chowari] と表記している (1-13は音声表記なし)。「れ」は [ri] と三母音で表記しながら「ちよ」は [cho] としている。また、1-14, 1-15では [chuwari] として三母音的表記に統一されているが、全体としては [cho-] と [chu-] が混在している。

## (2) 母音融合

本稿で対象としたオモロの内、母音の融合が認め

## 2. 子音について

## (1) 「ji」と「si」(宮良), 「shi」と「si」(台北)

宮良は「ji」と「si」、台北は「shi」と「si」として、「し」「せ」由来(前者)と「す」由来(後者)の音を表記し分けている (cf. 節名「し」、2 節目「せ」、3 節目「す」)。

## (2) 「tji」と「tsi」(宮良), 「chi」と「tsi」(台北)

宮良は「tji」と「tsi」、台北は「chi」と「tsi」として、「き」由来(前者)と「つ」由来(後者)の破擦音化音を表記し分けている (cf. 1-1, 1-14)。

## (3) 子音 [r] の脱落

[r] の脱落は「り」に見られる。本稿で対象としたオモロでは、「しより」、「もり」、「いのり」、「かざり」、「物しり」、「まぶり」、「あおり」、「とりよわちへ」、「まさり」、「しやり」、「けやりよわ」、「やりかわちへ」、「ゑりぢよ」、「やりおそう」、「ゑけり」

などがあり、宮良は全てに [r] の脱落および半母音 [j] の発生が認められ、台北は「まぶり」、「いのり」、「物しり」、「やりよわば」については [r] 脱落が認められない。この他、「しまじり」、「あきりぐち」、「ふみあがり」は、宮良、台北ともに [r] の脱落は認められず、いずれも統一的でない。

(4) 破擦音化

破擦音化は、本稿で対象としたオモロの語句では、[t > ch/tʃ]（「した」）、[k > ch/tʃ]（「よきやて」、「ききや」、「だしきや」、「きこゑ」、「つき」、「うきしま」、「きしやけ」、「あきり」、「たゝみきよ」、「けお」）、また、[tsu > tʃi]（「おぼつ」、「たてまつれば」）、[gya > ʒa]（「ぎやめ」）がある。

宮良も台北も、基本的には破擦音化させた語形で示している。しかし、「した」は、台北が [shicha] と破擦音化させているのに対し、宮良は [jita] として破擦音化させていない。「けお」は、宮良が [tʃu] と破擦音化を進めているのに対し、台北は [kyu] として破擦音化させていない。また「ぎやめ」は台北が [gyami] としているのに対して、宮良は [zami] とし破擦音化させている（組踊での発音を取り入れた可能性が考えられる<sup>8</sup>）。

3. 本文および音声の表記・記号等について

宮良も台北も、本文と音声表記とが明らかに異なる場合がある。

(1) 「ん（あんじおそい）」の有無

「あんじおそい」は、1-2, 3, 6, 10, 17, 31にでてくる。宮良は一貫して [adzi-suji] としており、「ん」を表記していない。台北は、1-2のみ [ajiusui] と加筆があり、研究会の検討結果と思われるが、それ以降は「anji usui」として「ん」を表記しており、修正も認められない。

(2) 促音（「うちへ」）

「うちへ」は1-4に出てくる。宮良は [uttʃi] とし促音で認識している。台北は [wuchi] として促音の表記はしていないが、本文の「ちへ」に傍線し「ツチ」と加筆しており、促音へ修正した痕跡がある。

(3) 濁音の有無（「さだけて」、「おしたてば」、「しよわれば」、「たてまつれば」）

「さだけて」は1-5に2か所出てくる。台北は [sadakiti] としているのに対し、宮良は本文を「さだけて」としているにも関わらず2か所とも [sadagiti] としており、本文の濁音の表記に沿っていない。

「おしたてば」は1-17に2か所出てくる。台北はいずれも [ushitatiba] としているのに対し、宮良は本文を「おしたてば」としているにも関わらず、「音記」のひとつは [uʃi-tati wa]、もう一方は [uʃi-tatiwa] としている。これは、別の箇所ですべて「～ば」を [-ba (or wa)] とし、濁音のない [wa] の可能性を示している場合があることと関連していると考えられるが、[ba] か [wa] か、判断の揺れていることが認められる。またスペースの有無も異なっている。

「しよわれば」は1-4に1か所出てくる。台北は [sho:riba] としているのに対し、宮良は [ʃiwariba (or wa)] としており、濁音のない [wa] の可能性も示しており、判断の揺れていることが認められる。

「たてまつれば」は1-14に1か所出てくる。台北は [tatimatsiriba] としているのに対し、宮良は [tatimatsiriba] としつつ、[ba] の下に [or wa] と傍書して濁音のない [wa] の可能性も示しており、判断の揺れていることが認められる。

(4) ハイフン

ハイフンは宮良が「音記」に取り入れており、収載された全てのオモロで使用されている（台北は用いていない）。基本的には前後の単語を関連付ける意味（「せぢ、だか、/ ʃidzi-daka」、「せぢとよみ、せ、いくさ、/ ʃidzi tujumi ʃi-ikusa」、「しま、うちの、とよみ/ ʃima-utʃi nu tujumi」、「とももきに、しちへ、ちよわれ/ tumumu sani-ʃitʃi tʃuwari」、「せ、ひやく、おしたてば、/ ʃi-ʃjaku uʃi-tatiwa」、「あゆが、うちは、なげくな/ aju-ga-utʃi wa nagikuna」など）、および複合語を品詞レベルに分析する意味（「きこゑ大ぎみ/ tʃikwi:-u:-zimi」、「しよもりぐすく/ ʃujimuji-gusiku」、「まだまもりぐすく/ madama-muji-gusiku」、「かぐらゑか/ kagura-ika」、「ともゝすへ/ tumumu-si:」、「世がけにせ/ ju-gaki-niʃi」、「みおやせば/ mi-ʔwe:ʃiwa」など）で用いている。

宮良は語の解釈によってハイフンの有無を決定しており、例えば「きこゑ」は、「きこゑ大ぎみ」では [tʃikwi:-u:-zimi] としているが、「きこゑ、たうやま」では [tʃikwi: to:jama] としており、前者にはハイフンがあり、後者にはない。これは「きこゑ大ぎみ」は一語の固有名詞であり、「きこゑ、たうやま」は一語ではなく、「きこゑ」は修飾語と考えているためと類推される。

なお、1-17で「まぶら」が2か所出てくるが、一方で [mabura]、他方では [ma-bura] としている事例もあるが、これは後者が誤記と考えられる。

(5) 字母（「よなはばま」、「ちや、はれ、まわらし」）

<sup>8</sup> 例えば副助詞「がで」（～まで）は、伊波の『琉球戯曲集』によると「jadi」（伊波 1974: p.256）と破擦音での発音が記されている。



「よなはばま」は1-29にみえるが、宮良は本文表記を「よなはばま」とし「音記」を [junaFa-bama] としているのに対し、台北は本文を「与那覇浜」とし、音声表記を [Yunafa bama] としている。「ちや、はれ、まわらし」は1-17に出てくる。宮良は本文表記を「ちや、はれ、まわらし」とし「音記」を [tʃa Fari mawaraʃi] としているのに対し、台北は本文を「常走り廻らせ」とし、音声表記を [cha farimārashi] としている。ここで注目したいのは、いずれも「は」を [ɸa] としている点である<sup>9</sup>。「よなは」は、実際に沖縄本島南部の与那覇が、おおよそ明治期の首里方言で [ˈjunahwa] (国立国語研究所 1998 : p829) と称されていることから、そのように発音、表記したと考えうる。「ちや、はれ、まわらし」は、台北では「常走り廻らせ」と解釈され、「はれ」は「走り」とする解釈が発音にも反映していると考えられる。しかし、「走る」は首里方言で [hajuN] (同 : p201) であり、[ɸari] と表記するには説明が必要であるが示されていない。なお、台北おもしろ研究会の比嘉盛章は、1934年に『おもしろさうし』には「h a 音」と「f a 音」が存在し、前者は字母「者」、後者は字母「波」で記し分けているとしている。

#### (6) その他(「いせゑけり」)

「いせゑけり」は1-31に出てくるが、宮良が本文表記を「いせゑけり」とし「音記」を [ifi-wikiji] としているのに対し、台北は本文を「気丈な」とし、音声表記を [ijichiri] としている。これは台北が、「いせゑけり」を首里方言の [ʔiziciri] (気丈である、しっかりしている) と考え、その解釈から、[ijichiri] という音声表記としたと考えられる。本来の本文表記が無視され、訳文調に「気丈な」となっていることから解釈を優先したことがうかがえる。

## おわりに

冒頭にも記したが、本稿は、宮良当壮による『おもしろさうし』の「音記」記事と、日本統治期台湾で開催されていた台北おもしろ研究会のテキストに収載されたオモロ音声表記の記録とを比較し、かつてのオモロ音読の有り様や方法等について検証するためのものである。

言語学者・宮良は「国語音声の研究の立場から首里びとの正しい発音を記して研究に資したい」(宮良 1980: p473) と自らの記事に記している。また台北おもしろ研究会は、首里金城町出身で、宮良より8歳年上の比嘉盛章がおり、同じく首里方言を参考にしたオモロ研究が行われたであろうことが想定される。

まず興味深いのは、宮良と台北の発音表記に相違点があるということである。同じ首里方言をベースとしながら、なぜ相違があるのだろうか。それは音読の考え方の違いに起因すると想定される。宮良はオモロの詞章を首里方言風に(首里方言の転訛のメカニズムに沿って、オモロ本文を変化させて)音読しようとし、台北はオモロ詞章を解釈し、実際の首里方言を当てて音読しようとしたのであり、そこにはずれや相違が生じることとなったのである。

例えば「物知り」という単語についていえば、宮良は [munu-fiji] とし、台北は [munu shiri] としている。宮良は [r] を脱落させ半母音を発生させている。台北は「r」を脱落させず、テキストの「月しろ」の右上欄外に「易者。物知りと連句」と記している。当時、知られていた首里語がある場合はそれを載せ、ない場合は無理に方音にしないようにしている意図が(宮良との相違から)うかがえる。宮良もムヌシリ(物知り)は知っていたと思われるが、オモロ表記の「音記」をすべくあえて「munu-fiji」としたと考えられる。

実は、[r] の前の母音が [i] の場合、[r] の脱落は起きない現象が首里方言には見られるが、宮良はこの現象に沿わない形での音価を示している。宮良は「しまじり」、「あきりぐち」について [r] を脱落させておらず、これらの事例の不統一さを勘案すると、あるいはこの現象を知らなかったためとも考えられる。

台北おもしろ研究会のテキストの音声記号について、音読の資料として取り上げ分析したのは本稿が初めてである。現在、オモロは表記通り音読することが主流となっているが、台北テキストのように方言を当てて読むことは全く意味がないわけではない。むしろ伊波普猷や仲原善忠、外間守善、高橋俊三、そして現在研究を進めている研究者たちも行っている有効な研究方法の一つである。自身のもつ、琉球語の感覚をオモロの詞章に当てて、“訓読”を試みるのである。つまり、琉球語の感覚が多少なりともない限りは、この方法は誰でも採用できるというものではない。琉球語が危機言語となっている現代において、このような形の訓読がいつまで可能であるのか先行きは不透明である。現状よりも琉球語・方言の感覚が残っていた明治期の研究者の思考を追えるという意味でも貴重な資料といえるだろう。

明治期の方言の感覚とオモロ語は、語義やニュアンス等が全く同じといえないことは論ずるまでもない。しかし、双方を比較し検討することはオモロの解釈を補助するに有効である。同義語があればそのまま解釈に活かすことが可能であり、相違点は検証することでオモロ語を含めた琉球語全体について、その変遷を眺望でき現代に

<sup>9</sup> 台北の「fa」という表記はローマ字によるものであり、音声記号の[fa]を示したのではなく、[ɸa]を示す意図で用いたと考えられる。

つながるや推移を見渡すことが可能となる。

このように、上記資料を通じて先学の研究について伴走すると、『おもろさうし』をそれぞれの時代なりに訓読をした痕跡に触れることができるという点のみにおいても貴重な資料であり、これらの資料を比較し検証することは『おもろさうし』および琉球文学研究の一助となるだろう。

最後に、本稿を作成するにあたり、西岡敏氏（沖縄国際大学教授）から様々にご教示いただいた。感謝申し上げます。

#### 【引用・参考文献】（五十音順）

1. 伊波普猷 1924 『琉球聖典おもろさうし選釈』 石塚書店
2. 伊波普猷 1974 『伊波普猷全集 第3巻』 平凡社
3. 沖縄古語大辞典編集委員会 [編] 1995 『沖縄古語大辞典』 角川書店
4. 沖縄大百科事典刊行事務局 1983 『沖縄大百科事典』 下巻 沖縄タイムス社
5. かりまたしげひさ 2014 『沖縄文化』 116号 沖縄文化協会
6. 国立国語研究所 1998 『沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
7. 島袋盛敏・翁長俊郎 1977[1968] 『標音評釈 琉歌全集』 武蔵野書院
8. 台北おもろ研究会 1940 「台北おもろ研究会テキスト」 私家版
9. 高橋俊三 1991 『おもろさうしの国語学的研究』 武蔵野書院
10. 田島利三郎 1924 『琉球文学研究』 青山書店
11. 仲宗根政善 1987 『琉球方言の研究』 新泉社
12. 仲原善忠 1957 『おもろ新釈』 琉球文教図書
13. 比嘉盛章 1942 『南島』 第2輯 南島編集所
14. 外間守善 1981 『日本語の世界9 沖縄の言葉』 中央公論社
15. 間宮厚司 2005 『おもろさうしの言語』 笠間書院
16. 宮城真治 1972 『古代の沖縄』 新星図書
17. 宮良当壮 1960 『月刊 琉球文学』 私家版
18. 宮良当壮 1980 『宮良当壮全集』 第8巻 第一書房
19. 宮良当壮 1980 『宮良當壮全集』 第12巻 第一書房

